



NIHU

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

要覧 2016

Research Institute for Humanity and Nature



表紙写真

	②	
④		①
⑤	③	

- ① photo / 田中 樹
山の中の村で小商いの聞き取り調査。カラフルな服装のおばちゃんたちが待ち構えている。なんでも聞いておくれ。
(タンザニア・ウルグル)
- ② photo / 渡辺 一生
秋空の中、地球研をドローンで撮影。地球研の建物と紅葉した木々のコントラストがとても綺麗でした。
(日本・京都)
- ③ photo / 武藤 望生
魚屋の若き跡取り。表情はもう一人前です。
(フィリピン・バナイ島)
- ④ photo / 遠藤 仁
インド西部を中心に雨季の終わりに開催される、ガネーシャ神のお祭り。色付き粉をかけ合います。
(インド・ラージャスターン州)
- ⑤ photo / 押海 圭一
12世紀の王の沐浴のために掘られた巨大な人口池で、いまは子どもたちが発泡スチロールを浮輪にして遊んでいる。
(カンボジア・スラ・スラン)





総合地球環境学研究所（地球研／ Research Institute for Humanity and Nature）は、地球環境学の総合的研究を行なう大学共同利用機関のひとつとして2001年4月に創設され、2004年の国立大学法人化にともない設立された人間文化研究機構に属しています。

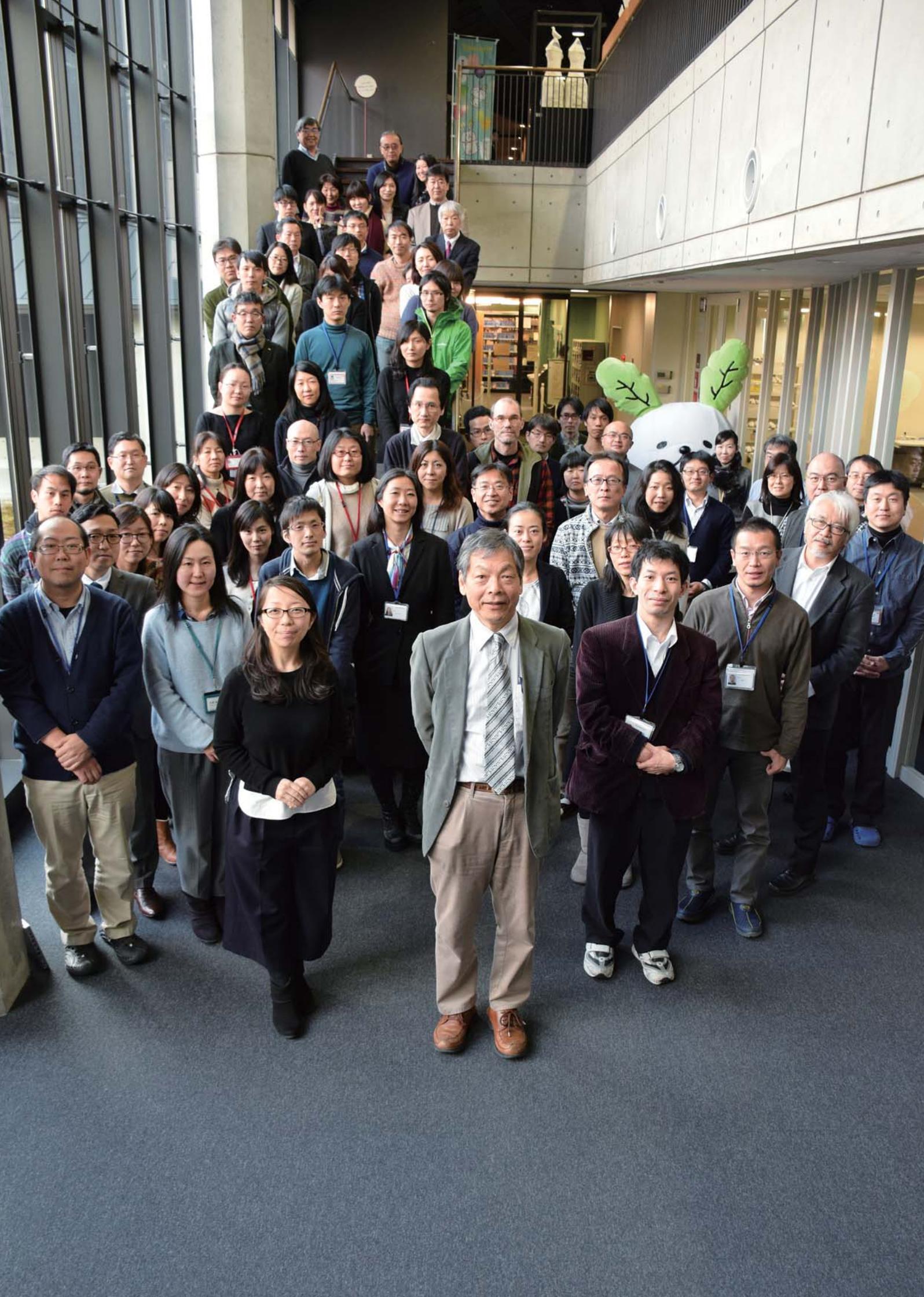
地球研のミッションは、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」という認識に基づき、地球環境問題の解決に役立てる総合的研究を行なうことにあります。人間と自然系との相互作用環の理解の上にたち、地球環境問題の解決に資する研究をさまざまな領域について進めています。環境の破壊（悪化）は、人間と自然系の相互作用環の不具合として現れますが、持続的で未来可能な相互作用環はどうあるべきか。地域的な特性や歴史的な経緯も考慮しながら、自然科学・人文科学・社会科学をまたぐ学際的な研究に加え、社会とも連携して、人と自然のあるべき姿を模索する課題解決志向型の研究を進めています。

創設以降、各研究プロジェクトが独創的な研究を進める一方、所全体として、社会のニーズに応えさまざまな事業に取り組んでいます。たとえば、2010年度からの第2期中期目標・中期計画では、未来設計イニシアティブを提案し、どうすれば問題を解決できるのかを探る設計科学的手法も導入した研究を推進するしくみを取り入れました。地球研10年の成果にもとづく『地球環境学事典』の刊行や、大学共同利用機関としての役割も踏まえたネットワーク型の「地球環境学リポジトリ事業」を進めました。さらに、2013年度には地球研全体の研究活動と組織体制についての外部評価を行ない、報告書にまとめました。この報告書にもとづき、2014年度から、これまでの研究プロジェクトのあり方や研究推進の体制など、徹底的な見直し作業に基づく改革を行ないました。さらに、統合的な地球環境研究を通して持続可能な地球社会をめざす国際計画 Future Earth への積極的な取り組みを進め、2015年度には Future Earth のアジア地域拠点（地域センター）としての活動も開始しました。

2016年度は第3期中期目標期間の初年度にあたりますが、上述の改革を踏まえて、研究プロジェクトを有機的につなぐ実践プログラム・コアプログラム制と、これを支えるための研究基盤国際センターを新たに発足させました。この新たな体制により、地球研が掲げるミッションを、社会とも協働してさらに強力に進めるつもりです。

総合地球環境学研究所長

安成 哲三



地球研のめざすもの

地球研では、地球環境問題を人類共通の課題と認識し、さまざまな学問分野の研究に取り組んでいます。そのなかで、地球研は少し異なった視点からアプローチをすることになりました。それぞれ個別の学問分野が研究を重ねても、それだけでは地球環境問題の本質に迫れないのではないか、必要なのは部分的な理解ではなく、人と自然の相互作用環を全体として理解できる「統合知」ではないかと考えたからです。そのために、自然科学・人文科学・社会科学の文理融合による学際研究に加え、社会と連携して問題解決をめざす超学際的アプローチを含めて「総合地球環境学」の構築をめざしています。

「総合地球環境学」は、地球環境問題の本質が人と自然の関係、つまり文化の問題にあるととらえていることに特徴があります。自然を畏敬するのも、冒涇するのも、あるいは自然を自分たちの一部であると感じるのも、利用すべき資源とみなすのも、文化の問題であると考えます。さらには、現在の地球上のさまざまな文化だけでなく、過去の文化にも学ぶ必要があります。そのなかでの課題は、今後私たちはどのような自然観（地球観）に基づく文化を、つまりどのような人と自然の関係を築き上げていくべきかということです。

この課題に対して、私たちはよく使われている持続可能性を超えた「未来可能性」という考え方を掲げました。今ある問題が何なのかを理解したうえで、私たちの孫、ひ孫の世代、さらに未来の世代にとって、今以上に住みよい地球を維持するためには、私たちは何をすべきかを考えることはもっと大切だからです。

地球環境問題を文化の問題から考えるということは、人びとのさまざまな価値観そのものを問題にすることでもあります。地球の将来を考えることは、否応なく異なる価値観との対立を生み、これまでもさまざまな社会的軋轢を生んできました。現在は、地球全体に人類活動の影響が隅々まで顕在化した「人類世（あるいは人新世）」ともいわれ、人類にとって限られた資源と劣化した生物圏、汚染が進行する大気圏・水圏のみの状況になりつつあります。また、資源や自然の恩恵における不平等や格差も広がっています。このような状況を人類共通の課題として



解決するためには、人類の多様で異なる価値観を生かしつつ、さまざまな対話や交流を通じて、人類共通の新たな価値を創造する必要があります。「未来可能性」は人と地球の未来のあるべき姿を考える「総合地球環境学」を構築するために、私たちが込めた思いを表したものです。

2016年度からの第3期中期計画における地球研のミッションとして、私たちは以下の3項目を掲げました。

- 地球研の研究蓄積と国内外の地球環境研究の成果を基礎とした、あるべき人間・自然相互作用環の解明と未来可能な人間文化のあり方を問う地球環境研究の推進
- 研究者コミュニティをはじめ、多様なステークホルダーとの密な連携による、課題解決指向の地球環境研究の推進
- 研究成果を生かした社会の現場における多様なステークホルダーによる取り組みへの参加・支援を通じた課題解決への貢献

地球研では、これらのミッションの達成に向けた研究を「研究プロジェクト方式」で進めてきましたが、第3期中期計画では、それぞれの個別プロジェクトを、より具体的な課題を掲げた3つの実践プログラム（①環境変動に柔軟に対処しうる社会への転換、②多様な資源の公正な利用と管理、③豊かさの向上を実現する生活圏の構築）にまとめることにより、相互の連携と統合をはかります。さらに、実践プログラムと協働してさまざまな問題群の解決へ向けた手法や理論の構築を進めるコアプログラムを立ち上げて、より統合的な研究体制の構築を進めます。

地球の将来を考えることは、研究者だけの課題ではなく、人類全体にとって大切な課題です。社会との対話と協働・連携をとおして、人と地球の未来可能なかわり方を、その多様性も含めて理解し、その答えを見つけていくのが地球研のめざすものということができます。

総合地球環境学研究所
要覧 2016

目次

はじめに.....	2
地球研のめざすもの.....	4
Part 1 地球研とは.....	7
プログラム・プロジェクト制.....	8
研究基盤国際センターの活動.....	10
Part 2 外部とのつながり.....	15
共同研究.....	16
人間文化研究機構のなかの地球研.....	18
Part 3 研究プロジェクト・予備研究の紹介.....	21
フルリサーチ (FR)	22
終了プロジェクト (CR)	40
予備研究 (FS)	44
資料編.....	55
研究成果の発信 (イベント・刊行物一覧)	56
組織.....	66
施設の紹介.....	70
交通案内.....	72

